

〈論文〉

日韓接触場面の LINE チャットの会話に おける相づちの送信方法の分析

—— 相づちの出現箇所に着目して ——

倉 田 芳 弥

要 旨

本研究は、ソーシャル・ネットワークキング・サービス上の異文化間コミュニケーションの特徴の一端を明らかにするため、日韓接触場面の LINE チャットの会話の日本語母語話者と韓国人非母語話者の相づちについてコミュニケーション・アコモデーション理論の観点から考察した。媒体の特性により相づちが離れて出現する現象に着目して送信方法を分析した結果、相づち全体の送信方法については、日本語母語話者と韓国人非母語話者に違いは見られず、早く反応を示す「単独」送信が多かった。これは母語話者が母語場面のスタイルを「維持」せず韓国人非母語話者のスタイルに「収束」したと解釈できる。出現箇所別の送信方法については、日本語母語話者、韓国人非母語話者ともに、出現箇所によって送信方法を使い分けており、両者とも母語場面のスタイルを「維持」したと見ることができる。日本語・韓国語両母語場面、接触場面のいずれも、発話の連鎖の複雑さを考慮して送信方法を調整していたため、「収束」の必要がなかったと考えられる。以上、コミュニケーション・アコモデーション理論を援用することにより、LINE チャットの会話の接触場面においても、音声会話と同様「収束」が見られること、媒体の特性によるコミュニケーション上の問題を回避するため、母語場面のスタイルの「維持」が見られることが明らかとなった。

キーワード：LINE, チャット, 相づち, 日韓接触場面, コミュニケーション・アコモデーション理論

1. はじめに

2011年にサービスを開始したLINEは、2020年現在の国内利用率は86.9%（総務省情報通信政策研究所2020）と国内のソーシャル・ネットワークキング・サービス（Social Networking Service: 以下、SNS）のコミュニケーションツールの一つとして定着している。このような中、LINEは、日本語母語話者と非母語話者によって使われる場合も増えており、日本語母語話者と非母語話者によるLINEのチャット機能を用いた会話（以下、LINEチャットの会話）の解明の必要性も高まってきている。

音声会話では、「話し手が話を進めていくために聞き手からの反応や働きかけや助けが必要」（堀口1997: 38）であり、話し手の話を聞いていることを示す相づちは円滑な会話の進行に重要である。LINEチャットの会話においても音声会話で見られる相づちの存在が指摘されており（岡本2016, 倉田2018a等）、文字媒介コミュニケーションにおいても、聞き手としての反応が必要であることがわかる。しかし、LINEチャットの会話では、相手がメッセージを送信した時に、すぐ返信しても文字を入力する時間がかかり、また遅れて返信することもある。そのため、隣接ペアの秩序が崩れ、隣接ペアが離れて生じる（岡本1998, Herring 1999等）というチャットの会話に特徴的な現象がLINEチャットの会話にも見られることが指摘され、同様に、LINEチャットの会話ではメッセージとそれに対する相づちが離れて出現するという現象が見られる（倉田2018a）。このような場合に、相づちだけを一つのメッセージとして送信すると、どのメッセージに対する相づちなのが分かりにくくなる可能性も考えられ、特に接触場面では、コミュニケーションを進めていく際に問題となることも考えられる。

そこで本研究は接触場面の日本語母語話者と非母語話者に着目し、相づ

ちの出現箇所に着目し、送信方法の特徴を明らかにする。また結果をコミュニケーション・アコモデーション理論の援用により考察し、SNS における異文化間コミュニケーションの特徴の一端を明らかにすることを目指す。

2. 先行研究

2.1 コミュニケーション・アコモデーション理論

音声会話の接触場面においては、異なる文化背景を持つ者同士がコミュニケーションを図るため、相づちの打ち方が母語場面とは異なり、会話参加者が相手の相づちの打ち方に合わせて調整するという (White 1989)。このような調整はコミュニケーション・アコモデーション理論 (Communication Accommodation Theory: 以下, CAT) (Giles et al. 1987) によって説明されている。アコモデーションとは、個人のコミュニケーション行動を変化させることにより、他者との社会的距離を近づけたり遠ざけたりすることであり (Giles and Ogay 2007)、コミュニケーションを調整する方略として、コミュニケーション行動を相手に近づける「収束 (convergence)」, 相手から遠ざける「分岐 (divergence)」, 相手のコミュニケーション行動に関係なく自身の元々のスタイルをとる「維持 (maintenance)」がある (Giles et al. 1991, Giles and Ogay 2007 等)。そして、「収束」が起こる動機として、コミュニケーションの効率を高めたり、相手と分かち合う自己および集団のイメージの獲得などがあげられている (Giles et al. 1987)。

White (1989) によると、英語母語話者は、母語場面より接触場面の方が相づちの頻度が高く、日本人非母語話者の相づちの頻度に合わせていたという。これは、接触場面において母語話者が非母語話者のスタイルに「収束」したもので (Giles et al. 1991)、会話参加者が同じ会話のスタイルを用いることでコミュニケーションの効率を高め、一体感を増していると

考えられる。

このように CAT は、接触場面の様相を解釈するための有用な理論だと考えられるが、LINE チャットの会話の接触場面において CAT を援用したものは、管見の限りない。そこで本研究は、文字媒介コミュニケーションの一つである LINE チャットの会話において CAT の援用を試みる。

2.2 相づちの出現箇所と送信方法に関する先行研究

音声会話では、どのような相づちを打つかということだけでなく、どこで相づちを打つかということも重要視され（堀口 1997）、出現箇所に着目した分析が行われている（畠 1982, 郭 2003 等）。

PC チャットの会話については、相づちの出現箇所に着目した研究は見られないが、送信方法については日本語母語場面の PC チャットの会話を対象とし、相づちを単独で送信する方法と、相づちと実質的な発話を一つのメッセージとして送信する方法の二つに分け、送信方法の傾向を見たものがある（倉田 2006）。倉田（2006）は、PC チャットの会話の日本語母語場面では、相づちと実質的な発話を一つのメッセージとして送信する方法よりも、相づちを単独で送信する方法が多く、相づちを単独で送信する方法は、相手のメッセージに対して早く反応を示す方略だと指摘している。

日本語母語場面の LINE チャットの会話について見ると、出現箇所別の送信方法について調べた倉田（2018a）がある。相づちの出現箇所を、メッセージとそれに対する相づちが連続して表示される「直後の相づち」とメッセージから離れて出現する「非直後の相づち」に分けて、メッセージのタイプ（「単独」と「相づち＋実質的な発話」）を調べたところ、メッセージの直後に相づちが出現する場合は、相づちを単独で送信することが多いのに対して、メッセージから離れて出現する非直後の場合、相づちと実質的な発話を一緒に送信することが多いという結果が見られた。メッセージの直後では、入力にかかる時間が短くて済むよう相づちを「単独」

で送信して、応答の同期性を高め、発話の連鎖が複雑な箇所（非直後）では、相づちを実質的な発話と一緒に送信することにより、メッセージ間の結束性を高めて相手の認知的負荷を下げるという方略が取られたという。

接触場面の LINE チャットの会話の研究について見ると、日中接触場面を対象として、出現箇所別の送信方法について分析した研究がある（倉田 2018b）。倉田（2018a）同様、発話の連鎖の複雑さに着目して相づちの出現箇所を「直後の相づち」と「非直後の相づち」に分け、それぞれの送信方法を倉田（2006）の分類（「単独」と「相づち＋実質的な発話」）に従って分類し、相づちの出現箇所別の送信方法を調べている。その結果、日中接触場面の日本語母語話者は、相づちが出現する箇所により送信方法を変えていたのに対し、中国語が母語の非母語話者は、相づちが出現する箇所に関わらず、相づちと実質的な発話を一つのメッセージとして送信する方法がほとんどであったという。以上のように、日中接触場面においては、出現箇所別の送信方法について、日本語母語話者と非母語話者に違いが見られたが、日中接触場面以外の接触場面の様相は明らかにされていない。また、倉田（2018b）で見られた日本語母語話者と非母語話者の違いは、それぞれの母語場面での会話のスタイルが、日中接触場面に持ち込まれた可能性が考えられるが、それぞれの母語場面との比較は行われていない。

そこで本研究では、日韓接触場面の LINE チャットの会話を対象とし、日本語母語話者と韓国人非母語話者の相づちの様相の一端を明らかにするため、相づちの出現箇所別の送信方法について調べる。そのためにまず相づちの送信方法の全体的な特徴を明らかにした上で、相づちの出現箇所別の送信方法を明らかにする。また両者の比較だけでなく、日韓接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者をそれぞれの母語場面と比較し、接触場面の特徴を明らかにする。

3. 研究目的及び研究課題

本研究は、日韓接触場面の LINE チャットの会話の日本語母語話者と非母語話者について、相づちの出現箇所によって送信方法は異なるのかという点を分析し、LINE チャットの会話の接触場面の特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

課題 1-1：日韓接触場面における日本語母語話者と韓国人非母語話者の相づちについて送信方法の使用傾向に違いは見られるか。

課題 1-2：日韓接触場面における日本語母語話者と韓国人非母語話者の相づちについて送信方法の使用傾向は、それぞれの母語場面の母語話者の相づちの送信方法の使用傾向と異なるか。

課題 2-1：日韓接触場面における日本語母語話者と韓国人非母語話者について、相づちの出現箇所別の送信方法に違いは見られるか。

課題 2-2：日韓接触場面における日本語母語話者と韓国人非母語話者について、相づちの出現箇所別の送信方法は、それぞれの母語場面における母語話者の相づちの出現箇所別の送信方法と異なるか。

4. 分析方法

4.1 分析データ

本研究は、2015～2018 年に行われた LINE⁽¹⁾ の文字チャットを用いたやりとりを対象とし、日本語母語話者（以下、JNS）10 名と韓国人非母語

話者（以下、KNS）8 名による 10 組の日韓接触場面（JNS1747 メッセージ、KNS1868 メッセージ、計 3615 メッセージ）、JNS31 名による 20 組の日本語母語場面（6351 メッセージ）及び KNS33 名による 20 組の韓国語母語場面（6525 メッセージ）をデータとする。収集データの量は 1 組あたり直近の 450 メッセージを上限とした。調査対象者の年齢は 19～36 歳であり、データをできる限り統制するため、全員女性友人同士とした。接触場面の非母語話者の日本語のレベルは上級以上である。

LINE の場面の特性の一つとして、同期性の程度には、ほぼ同期から非同期まで幅があることが指摘されている（西川・中村 2015、倉田 2018a）。メッセージの送信の間隔は相づちの送信方法に関係があると考え、相づちの分析に際し、分析データの 3 場面のやりとりの同期性の程度を調べた。分析対象とするメッセージの冒頭 1 時間を対象として、ペアごとに 1 分当たりのメッセージ送信数を求め、各場面の平均値を算出した。その結果、日本語母語場面の 1 分当たりの送信メッセージ数は 0.19 メッセージ、韓国語母語場面の 1 分当たりの送信メッセージ数は 1.09 メッセージ、日韓接触場面はその中間で、1 分当たり 0.83 メッセージであった。日本語母語場面と韓国語母語場面については、平均値に差が見られるか t 検定を行ったところ、有意差が見られた ($t(38)=-2.323, p<0.05$)。以上から、本研究の分析データについて見ると、韓国語母語場面は同期性が最も高い場面、日本語母語場面は同期性が最も低い場面であり、日韓接触場面の同期性の程度は両母語場面の中間であると言える。

4.2 相づちの定義及び分析対象とする相づち

堀口（1997: 77）は、相づちを「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」としている。本研究では、堀口（1997）を参考に、相づちを「話し手から送られた情報に対して、聞き手として反応する表現」と定義する。また、本研究の

表 1 相づちの種類の変義及び例

種類	定 義	例
相づち詞	感声的表現・概念的表現（小宮 1986）	感声的表現：あー、ええ、へえ、うん、お、ほお等
	感声的表現：感声的で概念を指さない表現。	概念的表現：そう、だよね、なるほど、確かに、本当、まじ等
	概念的表現：概念を表す言語形式だが感動詞的に用いられるもの。	
繰り返し	話し手のメッセージの全部または一部を繰り返すもの。	A：（略）今日は国会図書館だったの！ B： <u>国会図書館か</u>
言い換え	話し手のメッセージの全部または一部を言い換えるもの。	A：下北沢いきたい！（略） B：下北か！

※例はいずれも本データのものである。本データに「先取り」は見られなかったため、「先取り」以外のものを示した。

対象とする相づちの種類は、堀口（1997）を参考に、「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」とする（表 1 参照）。

小宮（1986）に従い、質問、呼びかけ、命令や要請等、話し手が積極的に対応を求めたものに対する応答は、聞き手として反応する表現ではないと考え、相づちとしない。また、堀口（1997）は、笑いや頷きといった非言語的なものは、相づちに含めていない。本研究も堀口（1997）に従い、絵文字、顔文字、スタンプ（絵のみのもの）等、非言語的要素は、分析対象外とする。但し、スタンプに含まれる文字は、分析対象とした。

4.3 分析枠組み

4.3.1 相づちの送信方法の分類

相づちの送信方法は、倉田（2006）に従い、相づちだけでメッセージを送信する方法（「単独」）と相づちと「実質的な発話」⁽²⁾（杉戸 1987: 88）で一

つのメッセージとする送信方法（「相づち＋実質的な発話」）に分類する。

4.3.2 相づちの出現箇所の分類

相づちの出現箇所については、倉田（2018a）に従い、相づちの出現箇所を以下の「直後」と「非直後」の二つに分類する。

① 「直後」

会話例 1 のように送信されたメッセージに対して、その直後に相づちが出現した場合、「直後」の相づちと分類とする。

会話例 1 「直後」の相づちの例（日韓接触場面の KNS）

331	19:21	JNS38	今日暑いよ	
332	19:21	JNS38	湿気がすごい	
→ 333	19:22	KNS36	<u>うん</u> 【同意・共感】	
334	19:22	KNS36	あせもやばい	

※左から、「→」は注目すべきメッセージ、メッセージ番号、送信時間、メッセージ送信者、送信内容を表す。会話例は原文のままである。下線は相づちを示し、【 】は相づちの機能を示す。会話例の右側の線は、相づちがどのメッセージに対する送信かということを表す（以下の会話例も同様）。

② 「非直後」

「非直後」とは、相手のメッセージとそれに対する相づちが連続せず、離れたメッセージに対して相づちが送信される場合である（会話例 2 参照）。「非直後」の場合、相づちが離れているため「直後」の相づちより発話の連鎖が複雑なものとなる。「非直後」の相づちには、メッセージとそれに対する相づちの間に、①話し手のメッセージ、②相づち送信者のメッセージ、③話し手と相づち送信者のメッセージの両方、が挿入される場合がある。

会話例 2 「非直後」の相づちの例（日韓接触場面の JNS）

35	3 : 31	KNS5	週末とかは人多いんじゃないかな	}
36	3 : 31	JNS32	いつ行きます？？	
→ 37	3 : 31	JNS32	<u>そうですね</u> 【同意・共感】w	

4.4 課題別の分析方法

まず 4.2 の定義と種類に従い、相づちの認定を行い、その際に一致率を求めた。日韓接触場面及び日本語母語場面は、両場面の全メッセージの約 15% について、筆者と日本語教育を専門とする日本語母語話者の研究協力者がそれぞれ相づちを認定し、一致率を Kappa 係数により求めたところ、 $k=.91$ であった。韓国語母語場面は、分析対象とする全メッセージの約 4 割について、筆者と日本語教育を専門とする韓国語母語話者の研究協力者が協議の上相づちを認定した。残りの相づちの認定はいずれも筆者が行った。

課題 1 では、相づちを「単独」と「相づち+実質的な発話」の二つに分類し、課題 1-1 では、日韓接触場面の JNS と KNS、課題 1-2 では、日韓接触場面の JNS と KNS と、それぞれの母語場面の母語話者について、まず送信方法の頻度と割合を求め、次に相づちの送信方法の使用傾向に統計上の有意差が見られるかどうかを調べるため、カイ二乗検定を行う。

課題 2 では、「直後」と「非直後」の二つに分類し、出現箇所別に送信方法の頻度及び割合を求める。課題 2-1 では、日韓接触場面の JNS と KNS それぞれについて、課題 2-2 では、日韓接触場面の JNS と KNS と、それぞれの母語場面の母語話者について、出現箇所別の送信方法の使用傾向に統計上の有意差が見られるかどうかを調べるため、カイ二乗検定を行う。

5. 結果と考察

5.1 相づちの送信方法（課題 1）

5.1.1 日韓接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者の比較

日韓接触場面の JNS と KNS の相づちの送信方法について分類した結果を表 2 に示す。まず接触場面の JNS について見ると、相づちを「単独」で送信する割合は 66% であるのに対し、相づちと実質的な発話を一つのメッセージとして送信する割合は 34% であり、相づちを「単独」で送信する方が多い。次に接触場面の KNS について見ると、相づちを「単独」で送信する割合は 61% で、相づちと実質的な発話を一つのメッセージとして送信する割合は 39% であり、JNS 同様、相づちを「単独」で送信するが多い。

接触場面の JNS と KNS について、相づちの送信方法に異なる傾向が見られるかどうかを調べるため、カイ二乗検定を行ったところ、有意差は認められなかった ($\chi^2(1)=0.427, p>.10$)。日韓接触場面において、JNS と KNS の送信方法に違いは見られず、同じように送信していることがわかった。

「単独」の送信方法は、相手のメッセージに対して、早く反応を示す方略であり（倉田 2006）、相づちの送信方法について、接触場面の JNS も KNS も、「単独」の送信が多かったのは、出来るだけ早く相手への反応を示し、同期性の高いやりとりを重視しているためだと考えられる。JNS と KNS の送信方法は同じ傾向が見られることがわかった。

表 2 相づちの送信方法の割合及び頻度（日韓接触場面の JNS と KNS）

	単 独	相づち + 実質的な発話	計
JNS	66% (98 回)	34% (50 回)	100% (148 回)
KNS	61% (67 回)	39% (42 回)	100% (109 回)

5.1.2 日韓接触場面の日本語母語話者及び韓国人非母語話者と、それぞれの母語場面の母語話者との比較

まず、JNS の日韓接触場面と日本語母語場面での相づちの送信方法について見る。表 3 は、JNS の日韓接触場面と日本語母語場面で見られる相づちを送信方法により分類した結果である（日韓接触場面の数値は表 2 の JNS の数値の再掲）。JNS は、接触場面では「単独」の方が約 7 割と多いのに対し、日本語母語場面では、「単独」は約 5 割に留まる。

日韓接触場面と日本語母語場面で、送信方法の傾向が異なるのかどうか、カイ二乗検定を行ったところ、有意差が見られた（ $\chi^2(1)=16.922, p<.01$ ）。JNS は、接触場面と日本語母語場面では、相づちの送信方法には異なる傾向が見られると言える。

表 3 JNS の相づちの送信方法の割合及び頻度
(日韓接触場面と日本語母語場面)

	単 独	相づち + 実質的な発話	計
日韓接触場面	66% (98 回)** ▲	34% (50 回)** ▽	100% (148 回)
日本語母語場面	47% (240 回)** ▽	53% (275 回)** ▲	100% (515 回)

** $p<.01$, ▲: 多い, ▽: 少ない

次に KNS の日韓接触場面と韓国語母語場面での相づちの送信方法について見る。表 4 は、KNS の日韓接触場面と韓国語母語場面で見られた相づちの送信方法である（日韓接触場面の数値は、表 2 の KNS の数値の再掲）。どちらも「単独」の方が多いという点は共通しており、接触場面では「単独」は約 6 割、韓国語母語場面では「単独」は約 7 割である。

日韓接触場面と韓国語母語場面で、相づちの送信方法に違いが見られるかどうかを調べるため、カイ二乗検定を行ったところ、有意差は見られず、有意傾向が見られた（ $\chi^2(1)=3.379, p<.10$ ）。日韓接触場面と韓国語母語場面では、相づちの送信方法には明確な違いが見られないことがわかる。

表 4 KNS の相づちの送信方法の割合及び頻度
(日韓接触場面と韓国語母語場面)

	単 独	相づち + 実質的な発話	計
日韓接触場面	61% (67 回) [†]	39% (42 回) [†]	100% (109 回)
韓国語母語場面	71% (280 回) [†]	29% (113 回) [†]	100% (393 回)

※[†] $p < .10$

KNS は相づちの送信方法を特に変えておらず (表 4 参照), 接触場面でも韓国語母語場面でも「単独」送信が多いのに対し, JNS は, 接触場面では, 母語場面と比べて「単独」送信が多くなっている (表 3 参照)。つまり, JNS が相づちの送信方法を変えて, KNS の相づちの送信方法と同様に「単独」を多く使用した結果, 接触場面で JNS と KNS に有意差が見られなかった (表 2 参照) ことがわかる。KNS にとっては, 相づちの送信方法を調整する負担が母語話者より大きい可能性が示唆される。

5.2 相づちの出現箇所別の送信方法 (課題 2)

5.2.1 日韓接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者の比較

日韓接触場面の JNS と KNS では, 相づちの送信方法には違いが見られないことが明らかになった。本項では, 日韓接触場面の JNS と KNS が相づちの出現箇所により送信方法を変えているのかどうかについて見る。

まず, 日韓接触場面の JNS について相づちの出現箇所別の送信方法を見ると (表 5 参照), 「直後」の相づちは, 「単独」が 73%, 「相づち + 実質的な発話」が 27% と「単独」で送信する場合が多い。一方, 「非直後」の相づちの場合, 「単独」は 56%, 「相づち + 実質的な発話」は 44% となっている。「直後」の相づちの場合も「非直後」の相づちの場合も, 「単独」の方が多いという点は共通しているが, 全体に占める割合は異なっている。

出現箇所により送信方法に異なる傾向が見られるかどうか, カイ二乗検定を行ったところ, 有意差が見られた ($\chi^2(1)=3.906, p<.05$)。接触場面に

において、JNS の相づちは、出現箇所により送信方法が異なり、「直後」の相づちの場合は「非直後」の相づちと比べて「単独」が多く、「非直後」の相づちの場合、「直後」の相づちと比べて「相づち＋実質的な発話」が多い。

表 5 相づちの出現箇所別の送信方法の割合及び頻度
(日韓接触場面の JNS)

	単 独	相づち＋実質的な発話	計
直 後	73% (65 回)* ▲	27% (24 回)* ▽	100% (89 回)
非直後	56% (33 回)* ▽	44% (26 回)* ▲	100% (59 回)

※ * $p<.05$, ▲：多い, ▽：少ない

次に、KNS の相づちの出現箇所別の送信方法について見ると（表 6 参照）、「直後」の相づちでは、相づちを「単独」で送信する割合は 70%，相づちと実質的な発話を一緒に送信する割合は 30%である。一方、メッセージと相づちが離れている「非直後」では、相づちの単独送信は 32%で、実質的な発話とともに相づちを送信する割合は 68%と大半を占めている。

出現箇所によって送信方法に異なる傾向が見られるかどうか、カイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（ $\chi^2(1)=10.334$, $p<.01$ ）。KNS の相づちは、出現箇所により送信方法が異なり、「直後」の相づちの場合は「単独」が多く、「非直後」の相づちの場合「相づち＋実質的な発話」が多い。

表 6 相づちの出現箇所別の送信方法の割合及び頻度
(日韓接触場面の KNS)

	単 独	相づち＋実質的な発話	計
直 後	70% (59 回)** ▲	30% (25 回)** ▽	100% (84 回)
非直後	32% (8 回)** ▽	68% (17 回)** ▲	100% (25 回)

※ ** $p<.01$, ▲：多い, ▽：少ない

日韓接触場面の JNS, KNS とともに、出現箇所によって送信方法を変えていることが明らかとなった。JNS も KNS も程度は異なるものの、発話の連鎖が複雑である「非直後」の相づちの場合、「直後」の相づちと比べて「相づち+実質的な発話」が有意に多いことがわかった。

では、JNS と KNS に違いはないのだろうか。両者の出現箇所別の送信方法の割合を見ると、「直後」の相づちの場合、JNS も KNS も送信方法の割合はほぼ同じで、「単独」が約 7 割、「相づち+実質的な発話」が約 3 割と共通している（表 5, 表 6 参照）。しかし、発話の連鎖が複雑な「非直後」の相づちを見ると、JNS の場合、「相づち+実質的な発話」は 4 割強（表 5 参照）に留まっているのに対し、KNS の場合「相づち+実質的な発話」は、7 割弱（表 6 参照）と、KNS の方が「非直後」の相づちの場合に、「相づち+実質的な発話」で送信する傾向が強い。そこで以下では「非直後」の相づちを取り上げ、日韓接触場面の JNS と KNS の特徴を見る。

まず発話の連鎖が複雑な箇所である「非直後」の場合に「相づち+実質的な発話」を用いる傾向がより強い KNS から見る。

会話例 3 は、KNS の「相づち+実質的な発話」で送信された「非直後」の相づちの例である。会話例 3 の前では、KNS26 が肉アレルギーになった話、祖母も一時期肉アレルギーだった話をしている。KNS26 は 162 で「そうそう」と「同意・了解」の相づちを送信しているが、もし「肉大好き!」という実質的な発話を一緒に送信せず、相づちだけを「単独」で送信した場合、159, 160 の肉が好きということに同意しているのか、161 のおばあちゃんはアレルギーが治ったという質問に対して返答しているのかが分かりにくい。ここで「肉大好き」と実質的な発話を一緒に送信することにより、どのメッセージに対する相づちかということが明確になっている。

会話例3 「相づち+実質的な発話」で送信された「非直後」の相づちの例
(日韓接触場面の KNS)

- | | | | |
|-------|------|-------|-----------------------------|
| 159 | 8:27 | JNS34 | だって KNS26 お肉大好きだもんね |
| 160 | 8:28 | JNS34 | 焼肉屋だし… |
| 161 | 8:28 | JNS34 | おばあちゃんはもうアレルギー治った？ |
| → 162 | 8:29 | KNS26 | <u>そうそう</u> 【同意・共感】!! 肉大好き！ |
| 163 | 8:33 | KNS26 | もう治った！ |

「相づち+実質的な発話」の場合、「単独」で送信する場合と比べて、メッセージを入力するのに時間がかかるが、どのメッセージに対する相づちかということを認識しやすくすることができる。このように KNS は、発話の連鎖が複雑な箇所では、メッセージに早く反応することよりも、談話の展開の分かりやすさを優先していると考えられる。

次に、日韓接触場面の JNS について見ると、出現箇所により送信方法に違いが見られたとはいえ、「非直後」の場合に「相づち+実質的な発話」を用いる程度は KNS よりも低い（表 5, 6 参照）。JNS が「非直後」の相づちを「単独」で送信すると、KNS には、どのメッセージに対する相づちか、分かりにくい可能性があるが、JNS はどのように送信しているのだろうか。

会話例 4 では、JNS36 が 33 で 31 に対して「非直後」の相づちを「単独」で送信している。この相づちの直前のメッセージ（32）は、相づち送信者である JNS36 が送信したメッセージである。このような場合、自分に対して相づちを送ることはないの、その前の 31 に対する相づちであることがわかる。相づちの直前のメッセージが相づち送信者である場合、「単独」で送信しても、どのメッセージに対する相づちかが分かりやすいため、「単独」で送信して、早く反応を示すことを優先していると考えられる。

会話例 4 「単独」で送信された「非直後」の相づちの例
(日韓接触場面の JNS)

30	11:40	JNS36	かわいい	
31	11:40	KNS35	ちょっと編集してもう一度アイコン設定した	}
32	11:40	JNS36	しんちゃんってこんなに可愛かったっけ	
→ 33	11:40	JNS36	<u>なるほど</u> 【理解・了解】	

日韓接触場面の JNS の「非直後」の相づちで、「単独」送信のものをみると、多くがこのパターンのものであった⁽³⁾。JNS の場合、KNS と比べて、「非直後」の相づちを「相づち+実質的な発話」で送信する割合は低いが、自分の送信したメッセージの次に「単独」で相づちを送信することで、分かりやすさを保ちつつ、同期性を高める方法がとられていると考えられる。このような送信方法による柔軟な対応は、母語話者のみに見られた。

以上、日韓接触場面の JNS と KNS の出現箇所別の送信方法について分析した。その結果、発話の連鎖が複雑な箇所である「非直後」の場合において、JNS と比べ KNS は「相づち+実質的な発話」を用いる傾向がより強く見られるものの、JNS と KNS とともに、相づちの出現箇所により送信方法の傾向が異なるという共通の特徴があることがわかった。

5.2.2 日韓接触場面の日本語母語話者及び韓国人非母語話者と、それぞれの母語場面の母語話者との比較

まず JNS の出現箇所別の送信方法について、日韓接触場面（表 7 参照）と日本語母語場面（表 8 参照）を比較すると、JNS は、接触場面、日本語母語場面のどちらの場合も、出現箇所別の送信方法には有意差が見られ（日韓接触場面： $\chi^2(1)=3.906$, $p<.05$, 日本語母語場面： $\chi^2(1)=11.198$, $p<.01$ ）、出現箇所により送信方法を変えていた。JNS は、接触場面でも日本語母

語場面でも、「直後」の相づちの方が、「非直後」の場合よりも「単独」が有意に多く、「非直後」の相づちの方が、「直後」の場合よりも「相づち＋実質的な発話」を有意に多く用いる傾向が見られた。

また割合で見ると、「直後」の場合、接触場面では、「単独」が73%、日本語母語場面では、「単独」が54%と接触場面の方が「単独」が全体に占める割合が高い。「非直後」の場合も、接触場面では、「単独」56%であるのに対し、日本語母語場面では39%と「単独」が全体に占める割合が高い。

日本語母語話者は、接触場面でも日本語母語場面でも出現箇所によって送信方法を変えているが、日本語母語場面と比べて接触場面の方が、「直後」の場合も、「非直後」の場合も、「単独」の相づちを多く用いる傾向が見られる。これは課題1で明らかになった通り、相づち全体の送信方法を見ると、日本語母語話者は、接触場面においてKNSの送信方法と類似しており、母語場面と比べて「単独」で送信する相づちが多いためと考えられる。

表7 相づちの出現箇所別の送信方法の割合及び頻度
(日韓接触場面のJNS) (表5の再掲)

	単 独	相づち＋実質的な発話	計
直 後	73% (65 回)* ▲	27% (24 回)* ▽	100% (89 回)
非直後	56% (33 回)* ▽	44% (26 回)* ▲	100% (59 回)

※ * $p < .05$, ▲ : 多い, ▽ : 少ない

表8 相づちの出現箇所別の送信方法の割合及び頻度
(日本語母語場面のJNS)

	単 独	相づち＋実質的な発話	計
直 後	54% (142 回)** ▲	46% (121 回)** ▽	100% (263 回)
非直後	39% (98 回)** ▽	61% (154 回)** ▲	100% (252 回)

※ ** $p < .01$, ▲ : 多い, ▽ : 少ない

次に、KNS の出現箇所別の送信方法について、日韓接触場面（表 9 参照）と韓国語母語場面（表 10 参照）について比較すると、KNS も接触場面、韓国語母語場面ともに、出現箇所別の送信方法には有意差が見られ（日韓接触場面： $\chi^2(1)=10.334, p<.01$, 韓国語母語場面： $\chi^2(1)=6.457, p<.05$ ），出現箇所により送信方法を変えていることがわかった。KNS も JNS と同様、接触場面と母語場面ともに、「直後」の相づちは、「非直後」の相づちより、「単独」送信が有意に多く、「非直後」の相づちは、「直後」の相づちより、「相づち+実質的な発話」が有意に多いという傾向が見られた。

また割合で見ると、「直後」の相づちの場合、KNS は、接触場面でも韓国語母語場面でも「単独」が約 7 割、「相づち+実質的な発話」が約 3 割であり、送信方法は類似しているが、「非直後」の相づちの場合、接触場面では「相づち+実質的な発話」が 68% であるのに対して、韓国語母語場面では、「相づち+実質的な発話」は 42% に留まっている。KNS は、「直後」の場合、母語場面と接触場面で特に送信方法を変えていないが、「非直後」の場合、接触場面では送信方法を変えており、母語場面と比べて「相づち+実質的な発話」を多く用いる傾向にあることがわかる。

4.1 分析データで述べた通り、日韓接触場面の方が、韓国語母語場面よりも同期性の程度は低いいため、相づちを単独で送信して早く反応を示す必要性が母語場面より低く、「相づち+実質的な発話」を多く用いていると考えられる。特に、発話の連鎖が複雑な箇所では、「相づち+実質的な発話」を多く用いて分かりやすさを重視していると考えられる。

表 9 相づちの出現箇所別の送信方法の割合及び頻度
（日韓接触場面の KNS）（表 6 の再掲）

	単 独	相づち+実質的な発話	計
直 後	70% (59 回)** ▲	30% (25 回)** ▼	100% (84 回)
非直後	32% (8 回)** ▼	68% (17 回)** ▲	100% (25 回)

※ ** $p<.01$, ▲: 多い, ▼: 少ない

表 10 相づちの出現箇所別の送信方法の割合及び頻度
(韓国語母語場面の KNS)

	単 独	相づち + 実質的な発話	計
直 後	74% (242 回)** ▲	26% (85 回)** ▼	100% (327 回)
非直後	58% (38 回)** ▼	42% (28 回)** ▲	100% (66 回)

※ ** $p < .01$, ▲: 多い, ▼: 少ない

出現箇所の違いにより送信方法を変えるということは、JNS の接触場面、母語場面、KNS の接触場面、母語場面に共通して見られ、「直後」の場合には「単独」で送信することが多く、「非直後」の場合には「相づち + 実質的な発話」で送信することが多いという点も共通していた。LINE チャットの会話は、音声会話と同等の同期性は確保されないという特性があり、メッセージとそれに対する相づちが離れて出現するという発話の連鎖の関係が崩れやすいという特性を有している。相づちを送信する際にはそれらの特性の影響を受け、状況に合わせて送信方法が選択されていると考えられる。

6. 総合的考察

ここでは分析結果を CAT (Giles and Wiemann 1987) の観点から考察する。

相づちの送信方法については、日韓接触場面の母語話者と韓国人非母語話者に違いは見られず、相づちを「単独」で送信することが多かった。さらに、日韓接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者をそれぞれの母語場面の母語話者と比較すると、日本語母語話者は、母語場面では「相づち + 実質的な発話」が多いが、接触場面では「単独」が多く、送信方法に有意な違いが見られた。一方、韓国人非母語話者は、韓国語母語場面の母語話者と比較して、送信方法に違いは見られず、「単独」送信が多かった。

この結果について CAT の観点から見ると、日韓接触場面において、韓国人非母語話者は同期性を高めるという母語場面の送信方法のスタイルを「維持」しているのに対して、日本語母語話者は、相づちと実質的な発話を一つのメッセージとして送るという母語場面の送信方法のスタイルを「維持」せず、「単独」送信を多く用いる韓国人非母語話者のスタイルに「収束」していると解釈できる。White (1989) では、相づちの頻度に関して、日本人非母語話者は頻度を「維持」したのに対して、英語母語話者は母語場面と比較して相づちの頻度が増え、日本人非母語話者のスタイルに「収束」したとしている。Giles et al. (1991) は、「収束」は対称か非対称となり得るとして、このようにどちらか一方が「収束」する場合を「非対称な収束」(asymmetrical convergence) としているが、本研究結果も White (1989) と同様、「非対称な収束」が見られたと解釈できる。LINE チャットの会話においても、異なる文化背景を持つ者が参加する接触場面において、日本語母語話者が非母語話者のスタイルに「収束」することで、同じ会話のスタイルを用いてコミュニケーションの効率を高め、一体感を増していたと考えられる。また、韓国人非母語話者が送信方法について母語場面のスタイルを接触場面で「維持」した理由としては、相手に合わせて相づちの送信を調整する負担が非母語話者にとって大きいということが考えられる。

次に、出現箇所別の送信方法について見ると、日韓接触場面において、日本語母語話者、韓国人非母語話者ともに、相づち出現箇所によって送信方法を変えていることが明らかとなった。日本語母語話者も韓国人非母語話者も程度は異なるものの、発話の連鎖が複雑な「非直後」の相づちの場合、「直後」の相づちよりも「相づち+実質的な発話」が有意に多いことがわかった。発話の連鎖が複雑である「非直後」では、韓国人非母語話者は、「相づち+実質的な発話」を多く用いて、相づちがどのメッセージに対するものかを示して、談話展開を分かりやすくしていたのに対し、日本

語母語話者は、「非直後」の場合に、「相づち+実質的な発話」で分かりやすくするだけでなく、自分の送信したメッセージの次に「単独」で相づちを送信することで、分かりやすさを保ちつつ同期性を高める方法もっており、柔軟に送信方法が選択されていた。さらに出現箇所別の送信方法について、日韓接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者をそれぞれの母語場面と比較した結果、接触場面で見られた送信方法の使い分けを母語場面でも同じように行っていることが明らかとなった。

この結果を CAT の観点から考えると、接触場面において出現箇所により送信方法の使い分けを行うということは、日本語母語話者も韓国人非母語話者もそれぞれの母語場面のスタイルを「維持」していたと解釈できる。これは、両母語場面のスタイルがもともと同じであるため、「収束」の必要がなかったと考えられる。相づちの出現箇所の違いによって、送信方法を変えるということは、メッセージと相づちが離れて出現するという媒体の特性に対応するものである。媒体の特性によりコミュニケーション上の問題が起こる可能性を回避することが言語の違いに関わらず観察され、さらに接触場面においてもそのスタイルが「維持」されたと見ることができる。また、接触場面において日本語母語話者は、送信方法全体では、韓国人非母語話者に「収束」しつつ、出現箇所別の送信方法については、媒体の特性によるコミュニケーション上の問題を回避するため、自分の送信メッセージの後に相づちを送信する場合は「単独」で送信する等、柔軟に送信方法を選択して、母語場面のスタイルを「維持」していたと考えられる。

7. 終わりに

本研究は、LINE チャットの会話を対象とし、日韓接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者の相づちの送信方法について、相づちの出現箇

所に着目して分析を行った。その結果、相づち全体の送信方法については、韓国人非母語話者は韓国語母語場面のスタイルを「維持」したのに対し、日本語母語話者は、韓国人非母語話者のスタイルに「収束」することにより、両者ともに相づちを「単独」で送信するという特徴が見られた。文字媒介コミュニケーションにおいて、相手に早く反応を示し、同期性を高めることを重視していることが明らかとなった。

出現箇所別の送信方法については、発話の連鎖が複雑になるという媒体の特性によるコミュニケーション上の問題を回避するため、言語の違いに関わらず日本語・韓国語両母語場面で、発話の連鎖の複雑さを考慮して相づちの出現箇所によって送信方法を変えていた。また、その母語場面のスタイルは、日韓接触場面でも日本語母語話者と韓国人非母語話者双方により「維持」されることがわかった。また日韓接触場面において日本語母語話者は、相づちの送信方法全体では韓国人非母語話者のスタイルに「収束」し非母語話者に歩み寄る姿勢を見せつつ、出現箇所別に送信方法を見ると母語場面のスタイルを「維持」しており、コミュニケーションを効率的に問題なく進めるよう柔軟に対応している様子が窺えた。

以上の結果は、理論的枠組みとして CAT を援用することにより、明らかにできたものであり、LINE チャットの会話を始めとする文字媒介コミュニケーションにおいても、音声会話と同様に CAT の枠組みの適用が可能であることが示されたと言える。今後、LINE チャットの会話など文字媒介コミュニケーションの接触場面の様相を明らかにするために CAT の援用が有効であると考えられる。

今後の課題としては二点あげられる。まず今回、出現箇所別の送信方法において、日韓接触場面の日本語母語話者と非母語話者の結果に違いは見られなかった。これは、日中接触場面の日本語母語話者と中国語が母語である非母語話者を分析した倉田（2018b）とは異なる結果であった。倉田（2018b）では、非母語話者による出現箇所別の送信方法の使い分けが見

られず、今回の結果と併せて考えると、接触場面の出現箇所別の送信方法の使い分けにも、母語場面の会話のスタイルが影響している可能性が考えられる。今後、非母語話者の母語が異なる接触場面を対象とするなど、更なる分析が必要である。

また今回、韓国人非母語話者の「収束」あるいは、双方が「収束」する対称的な「収束」は見られなかった。今後は、LINE チャットの会話の接触場面において、非母語話者による「収束」や対称的な「収束」が見られるのかどうか、相づちの機能など、その他の観点に着目して分析し、SNS における異文化間コミュニケーションの特徴を解明していきたい。

《注》

- (1) 日韓接触場面、韓国語母語場面については、LINE と同等の機能を有する KakaoTalk のデータも含まれている。
- (2) 杉戸 (1987) は実質的な発話を「あいづち的な発話以外の種類の発話。何らかの実質的な内容を表す言語形式を含んで、判断、説明、質問、回答など、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話」(p.88) としている。
- (3) 日韓接触場面の JNS が「単独」で送信した「非直後」の相づち 33 回 (表 5 参照) のうち、自分の送信したメッセージの次に出現しているものは、20 回である。

参考文献

- 岡本能里子 (1998) 「しゃべる ― チャットのコミュニケーション空間」『現代のエスプリ』 370, 127-137.
- 岡本能里子 (2016) 「雑談のビジュアルコミュニケーション ― LINE チャットの分析を通して ―」村田和代・井出里咲子 (編)『雑談の美学 ― 言語研究からの再考』ひつじ書房, 213-236.
- 郭末任 (2003) 「自然談話に見られる相づち的表現 ― 機能的な観点から出現位置を再考した場合 ―」『日本語教育』 118, 47-56.
- 倉田芳弥 (2006) 「チャットの接触場面における談話管理 ― 日本語母語話者と非母語話者の相づちの比較から ―」『人間文化論叢』 8, 277-288.
- 倉田芳弥 (2018a) 「LINE チャットの会話における相づちの働き ― 「機能」及び談話管理を巡る方略的観点から ―」『言語文化と日本語教育』 53, 1-10.

- 倉田芳弥 (2018b) 「接触場面の LINE の会話における相づちの機能——日本語母語話者と非母語話者の比較から——」『人文科学研究』14, 83-97.
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態——出現傾向とその周辺——」『語学教育研究論叢』3, 43-62.
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつき」国立国語研究所 (編) 『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相——座談資料の分析——』三省堂, 68-106.
- 総務省情報通信政策研究所 (2020) 『令和元年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』 https://www.soumu.go.jp/main_content/000708015.pdf (2021 年 10 月 14 日)
- 西川勇佑・中村雅子 (2015) 「LINE コミュニケーションの特性の分析」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』16, 47-57.
- 畠弘巳 (1982) 「コミュニケーションのための日本語教育」『月刊言語』11(13), 56-71.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- Giles, H., Coupland, N. & Coupland, J. (1991). Accommodation theory: Communication, context, and consequence. In Howard Giles, Justine Coupland & Nikolas Coupland (eds.), *Contexts of Accommodation*, 1-68. Cambridge: Cambridge University Press.
- Giles, H., Mulac, A., Bradac, J.J., & Johnson, P. (1987). Speech accommodation theory: The first decade and beyond. In Margaret L. McLaughlin (ed.), *Communication Yearbook* 10, 13-48. Newbury Park, CA: Sage.
- Giles, H., and Ogay, T. (2007). Communication accommodation theory. In Bryan B. Whaley & Wendy Samter (eds.), *Explaining Communication: Contemporary Theories and Exemplars*, 293-310. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Giles, H and Wiemann, J. (1987). Language, Social Comparison, and Power, In S. Chafee and C. R. Berger (eds.), *Handbook of Communication Science*. 350-384. CA: Newbury Park.
- Herring, S. C. (1999). Interactional coherence in CMC. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 4(4). <http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/j.1083-6101.1999.tb00106.x/full> (2021 年 10 月 14 日)
- White, S. (1989). Backchannels across cultures: A study of Americans and Japanese. *Language in Society*, 18, 59-76.

付 記

- (1) 本研究は科学研究費基盤研究 (C) 「LINE をプラットフォームとした多言語多文化社会におけるネットワーク構築」(平成 28 年度～30 年度課題番号: 16K02803 研究代表者: 佐々木泰子) で収集したデータを使用している。ここに記して感謝の意を表します。
- (2) 本論文は、博士学位論文 (倉田芳弥 (2019) 「LINE の会話における相づちの研究——日韓母語場面と日韓接触場面との比較から——」お茶の水女子大学大学院博士学位論文 (未公刊), 1-154.) の一部に加筆・修正を加えたものである。
- (3) データの収集に先立ち、筆者のデータ収集当時の所属大学の倫理審査委員会に申請し、必要な手続きを完了している。

(原稿受付 2021 年 10 月 27 日)